

## 胡適の文学論における「形式」と「内容」

\*山下大喜

はじめに

- 1 歴史教科書にみる胡適の文学論
  - 2 「形式」と「内容」
- むすびにかえて

### はじめに

胡適は五四時期を代表する知識人であり、胡適の文学論は口語文学の確立を旨とした文学革命の口火を切ったものとして広く知られている。文学の書き言葉として白話文（口語文）を再評価する際に、胡適は新文学の「形式」と「内容」はいかにあるべきか自らの主張を展開していくことになる。胡適は密接な関係にある「形式」と「内容」の双方から主張を展開したものの、後に胡適へ向けられた批判をみれば、「形式」だけが取り出され、胡適の文学論は形式主義に偏重していると指摘された。本稿の目的は、形式主義への偏重という批判を受ける余地が胡適の文学論のいかなる点にあり、そうした批判がいかに形成されてきたのかについて明らかにすることである。

胡適の文学論は1910年代後半に『新青年』を拠点として文学革命を牽引する存在となったが、マルクス主義文芸理論の受容を背景に早くも1920年代後半からは批判の対象となった。1950年代半ばには中国共産党の文芸政策との関連において、胡適は激しい批判運動的となり、80年代に中国国内で再評価がなされるまで研究史においても胡適が前面に出されることはなかった<sup>(1)</sup>。こうした思想史的系譜に鑑みても、胡適の文学論は1920年代以降の文芸政策と密接な関係にあり、マルクス主義的な文芸思潮の影響から頻りに議論の対象となっていたことがわかる。胡適の文学論に対する批判の主たる論点として形式主義への偏重をあげるこ

とができ、そうした指摘は歴史的に形成された論争的課題として中国歴史教科書の題材にもなったほどである。2019年は1919年の五四運動から100年目にあたり、研究史としても節目の一年となった<sup>(2)</sup>。欧陽哲生（2012）が述べるように、「五四」は現代へと至る思想史的系譜のなかで絶え間なく連綿と解釈され続け、そこで形成された「五四」解釈はその時々の政治思想的状況とも密接な関係にあった<sup>(3)</sup>。言いかえれば、五四時期を代表する知識人である胡適もそうした思想史的系譜のなかで論じられ、時には厳しい批判運動にさらされることになったのである。

そこで、本稿では「五四」の思想史的系譜をふまえながら、文学革命にあたって胡適が主張していた新文学の「形式」と「内容」の枠組みに着目する。胡適は十分に「内容」をもった豊かな新文学とするため、まず足かせとなっている難解な「形式」からの解放が必要であると説いていた。こうした胡適の「形式」と「内容」に関する主張をふまえることで、形式主義への偏重という胡適批判の論点が思想史的系譜のなかでいかに形成されてきたのかをより克明にすることができる。

以下、第1節では、歴史的に形成された胡適に対する評価をみるために、胡適の文学論が「活動と探究」の題材となっている人民教育出版社の歴史教科書を取りあげる。そのうえで、第2節では、胡適が実際に新文学の「形式」と「内容」をいかに主張していたのか明らかにしたうえで、そうした主張のいかなる点に批判を受ける余地があったのかについて考察する。

\* 名古屋大学大学院学生


日本学術振興会特別研究員（DC2）

## 1 歴史教科書にみる胡適の文学論

1920年代後半からマルクス主義文芸理論の受容を背景に、「文学革命」から「革命文学」の時代へとうつりゆくなかで<sup>(4)</sup>、「形式」だけが取り出され、胡適の文学論が批判の対象になった。1950年代半ばの全面批判期には、「形式」の解放から取り組むべきとする胡適の文学論は唯物論の原理に反した資産階級によるものであると論難された。このように胡適の文学論にとって「形式」はその論争史を振り返るうえでも常に前面へと出されたキーワードの一つであったことがわかる。すなわち、胡適へ向けられた批判が歴史教科書の題材となったのは、実際の中国文学史研究における論争的課題を活用することで、議論（Argument）を組み入れた問いの設定にためでもあった。そこで、本節では、歴史的に形成されてきた胡適に対する評価をみるために、胡適の文学論が「活動と探究」の題材となっている人民教育出版社の歴史教科書を取りあげる。

改革開放後の90年代を皮切りに「素質教育」への転換が議論されるなかで、中国のカリキュラム政策は「『書物中心』『教科中心』『知識中心』であった従来の教育のあり方を打破し、実践的学習、現実の生活、価値観・情緒・態度の育成などにより大きな力点を置くものに変化した<sup>(5)</sup>。具体的には、「21世紀の情報化・国際化社会に対応できる人間の育成を目標とし、詰め込み式の知識偏重教育から学習者主導で総合的な能力を求める素質教育への転換が図られ」たのである<sup>(6)</sup>。こうした背景のもと、教科書は単独の版本による中央集権的な「一本」体制から認可されたものが使用できる「多本」体制となった。これにともなって、歴史教科書も従来の知識偏重、思想注入から脱却し、生徒が主体的に歴史を解釈し判断するための史料分析や探究活動などが新たに組み込まれるようになった。

本稿で取りあげる人民教育出版社版『義務教育課程標準実験教科書 中国歴史 八年級 上冊』は、2001年の「全日制義務教育歴史課程標準」をもとに編纂さ



### 活动与探究

阅读分析：有人说：“胡适所主张的文学革命只限于文体形式方面的改良。”请阅读下面胡适写的两段文字，谈谈你对上述意见的看法。

1. “我们也知道单有白话未必就能造出新文学；我们也知道新文学必须要有新思想做里子。但是我们认定文学革命须有先后的程序：先要做到文字体裁的大解放，方才可以用来做新思想新精神的运输品。”

——《〈尝试集〉自序》

2. 新文学应反映“工厂之男女工人，人力车夫”、“婚姻苦痛，女子之位置”等种种社会问题。

——《建设的文学革命论》

図1 活動と探究「第9課：新文化運動」

れたものである<sup>(7)</sup>。前述した素質教育への転換を背景に、この人民教育出版社版歴史教科書も生徒に主体的な学習を促すための構成となっている。石鷗（2015）は、生徒の主体的な学習のため「動脑筋（考えてみよう）」、「練一練（練習問題）」、「活動と探究（活動と探究）」といった形で單元ごとに課題設定がなされていることは人民教育出版社版歴史教科書の特筆すべき特徴であるとしている<sup>(8)</sup>。

その「第9課：新文化運動」において、胡適の「文学改良芻議」は文学革命の発火点となり、胡適の白話詩集『嘗試集』は魯迅の『狂人日記』とともに白話文を広く普及させていくきっかけになったものと位置づけられている。そのうえで、胡適の文学論を題材として図1のように「活動と探究」が設定されている<sup>(9)</sup>。

図1の「活動と探究」は、胡適の文学論を題材としながら、史料読解をもとに、「胡適が主張した文学革命は文体形式の改良に限られている」という見方に対して、自らの意見を表明するものとなっている。この「活動と探究」が実際の胡適によるテキストを解釈、分析しながら、課題に対して意見を表明する形になっているのは、前述した素質教育にともなうカリキュラム政策の転換を背景に、生徒が主体的に歴史学習を取り組めるようにするためでもあった。

具体的に、この「活動と探究」では歴史的に形成されてきた胡適に対する評価の一つとして、「胡適が主張した文学革命は文体形式の改良に限られている」が課題設定の基盤となっている。そのうえで、胡適によって記された文学論に関連する史料が二つ提示されている。まず〔1〕として提示されているのは胡適が白話詩の創作を試みた作品集『嘗試集』である<sup>(10)</sup>。その序文からは、まず文字体裁の解放に取り組むことで、初めて新文学を新思想、新精神の輸送品として用いることができると主張していたことがわかる。〔2〕として提示されている「建設的文学革命論」は『新青年』第4巻第4号（1918年4月）に掲載され、この反響によって国語統一運動と文学革命が一つに合流したとされているものである<sup>(11)</sup>。そのなかで、胡適は社会問題を新文学に幅広く反映させるべきと主張していたことがわかる。〔1〕と〔2〕を総合すれば、胡適の文学

論が「形式」に限られていたと断言することはできない。あくまでも順序性をつけて、まず「形式」の解放から取り組むべきであり、豊かな「内容」をもった新文学にするためには社会問題を幅広く反映させるべきと主張していたのである。

## 2 「形式」と「内容」

胡適の文学論に関する論争史を振り返るうえで、「形式」は胡適批判とその応答関係の主たる論点とされたキーワードの一つである。前節でみたように、胡適の文学論へ向けられた批判は中国文学史研究の対象ともされる論争的課題であったため、そのことを活かして人民教育出版社の歴史教科書における「活動と探究」の題材となった。これらをふまえ、本節では、胡適が文学革命に向けて提示した八か条の形成過程を手がかりとしながら、胡適がいかんして「形式」の解放から取り組むべきであると主張するようになったのかについて明らかにする。そのうえで、形式主義に偏重しているとの批判を受ける余地が胡適のいかなる点にあったのかについて考察する。

胡適が文学革命に向けて提示した八か条の形成過程については、すでに多くの諸研究によって論及がなされているところである<sup>(12)</sup>。八か条の形成過程のなかでも、本節では、以下の表1と表2にある八か条の基盤となったアメリカ留学時代の日記から順に検討していきたい。

まず1916年2月3日の日記（表1）には、「文学の大病」を取り除くために取り組むべき三項目として、「須言之有物（内容のあることを書くべきである）」、「須講文法（文法を重視すべきである）」、「当用“文之文字”（“散文的語法”を用いるべきである）」があげられている<sup>(13)</sup>。ここで胡適がいう「文学の大病」とは、ただ形式があるのみで精神がなく、質をとまわらないリズムミカルな韻のような辞のみがある状態を指している。続いて、1916年4月17日の日記（表2）には、文学に「三大病」があるとして、「無病而呻（むやみに呻吟する）」、「摹倣古人（古人を模倣する）」、「言之無物（内容の無いことを書く）」があげられている<sup>(14)</sup>。ここで胡適は文学が際限なく形式だけに縛られている状態に

表1：1916年2月3日

1916年2月3日：留学日記	
1	須言之有物。
2	須講文法。
3	当用“文之文字”。

表2：1916年4月17日

1916年4月17日：留学日記	
1	無病而呻。
2	摹倣古人。
3	言之無物。

胡適の文学論における「形式」と「内容」

あり、総じてその状態が文学の衰退を招いていると記している。

以上のアメリカ留学時代における日記の記述に鑑みれば、十分に「内容」のある新文学を創り出すため、旧文学が「形式」だけに縛られている状態を批判し、胡適は文学革命に向けて取り組むべき項目を着想していったことがわかる。これらをふまえて、以下の表3から表6にあるように、「形式」と「内容」の双方の条項を織り交ぜながら、胡適は文学革命の八か条を構築したのである<sup>(15)</sup>。後に胡適は文学革命に向けた八か条が「形式」と「内容」の両面から着想したものであり、「形式」と「内容」を分けて二元論的に考えることはできないとしている<sup>(16)</sup>。このような「形式」と「内容」の関係性を「談新詩」（1919年10月）では以下のように記している<sup>(17)</sup>。

私は、文学革命の運動とは、古今東西、大概は「文の形式」の側面から手をつけて、まず話し言葉、文字、文体などの大いなる解放を要求するものであると常に説明してきた。300年前のヨーロッパ各国において、国語で書かれた文学がラテン文学にとってかわったとき、話し言

葉、文字の大解放が行なわれた。例えば、18から19世紀フランスのユーゴー、イギリスのワーズワースなどが主張した文学改革は詩の言葉、文字の解放であった。加えて、ここ数十年来の西洋における詩の革命も言葉、文字、文体の解放を求めている。この中国における文学の革命運動でも、まず第一に話し言葉、文字、文体の解放を要求している。新文学での言葉は白話であり、新文学の文体は自由で、規律に縛られていない。一見すると、これらは「文の形式」一方面の問題のように思えるが、その見方は重要とは認めがたい。文の形式と内容は密接に関係しているのである。形式上の束縛があつては、精神が自由に発展せず、よい内容を十分に表現することはできない。新しい内容と精神へと到達するには、まず先に精神を束縛してきた足かせを打ち破らなければならないのである。

（傍線部は筆者による）

胡適は「形式と内容は密接に関係し」、「形式上の束縛があつては、精神が自由に発展せず、よい内容を十分に表現することはできない」とした。すなわち、胡

表3：1916年8月21日

1916年8月21日：留学日記	
1	不用典。
2	不用陳套語。
3	不講对仗。
4	不避俗字俗語。（不嫌以白話作詩詞）
5	須講求文法。 - 以上為形式的方面。
6	不作無病之呻吟。
7	不摹倣古人。
8	須言之有物。 - 以上為精神（内容）的方面。

表4：寄陳独秀

1916年10月：『新青年』第2巻第2号	
1	不用典。
2	不用陳套語。
3	不講对仗。 （文当廢駢，詩当廢律）
4	不避俗字俗語。 （不嫌以白話作詩詞）
5	須講求文法之結構。 此皆形式上之革命也
6	不作無病之呻吟。
7	不摹倣古人，語語須有個我在。
8	須言之有物。 此皆精神上之革命也

表5：文学改良芻議

1917年1月：『新青年』第2巻第5号	
1	須言之有物。
2	不摹倣古人。
3	須講求文法。
4	不作無病之呻吟。
5	務去濫調套語。
6	不用典。
7	不講对仗。
8	不避俗話俗語。

表6：建設的文学革命論

1918年4月：『新青年』第4巻第4号	
1	不做言之無物的文字。
2	不做無病呻吟的文字
3	不用典。
4	不用套語爛調。
5	不重对偶 - 文須廢駢，詩須廢律。
6	不做不合文法的文字。
7	不摹倣古人。
8	不避俗話俗語。

適は「形式」から「内容」へと順序性をつけて、「新しい内容と精神へと到達するには、まず先に精神を束縛してきた足かせを打ち破らなければならない」と説いていたのである。胡適がこのように記したのも、「内容」がともなわないまま「形式」だけに縛られている旧文学の状態に鑑み、十分に「内容」のある新文学を建設する具体的な方策を示すためであった。

総じて、胡適による新文学の「形式」と「内容」に関する主張は八か条の形成過程とともに創出されたものであり、「形式」と「内容」の双方が一貫して保持されていたことがわかる。しかしながら、後に「形式」だけが取り出される形で胡適の文学論は厳しい批判にさらされることになる。では、そうした批判を受ける余地が胡適のいかなる点にあったのだろうか。以下の二点に理由があると考えられる。

第一に、「形式」に比べて、胡適の文学論では「内容」に対する具体的な言及がなされなかった点である。たしかに先にあげた胡適の八か条には「内容」に関する条項が含まれ、「建設的文学革命論」において新文学は社会問題を幅広く反映させるべきとしていた。しかし、沈国威（2013）の整理に拠れば、アメリカ留学時代の日記には史料考証を通じた文法の形式的側面についての論及が多くを占めていた<sup>(18)</sup>。アメリカ留学期に胡適が文法へ関心を寄せていたのは馬建忠による『馬氏文通』の影響が大きいと考えられる。『馬氏文通』はヨーロッパの言語学を取り入れつつ文法の体系化を試みたものであり、中国近代における文法学の創始と位置づけられるものである<sup>(19)</sup>。アメリカ留学時代の胡適による1912年6月12日の日記には『馬氏文通』の読書録が記されている<sup>(20)</sup>。この『馬氏文通』をふまえ、中国人留学生からなる東アメリカ学生会の1915年年次大会において、胡適は言語を教授するうえで文法はその近道となるため、文法を小学校から大学まで必須の分野にするべきであると主張した<sup>(21)</sup>。胡適は文法の必要性を唱えつつも、実際には文法の体系化のため標点符号や「吾と我」など形式的側面に関する言及が多くを占めていた。その結果として、「常に『形式』への言及が多く、『内容』への言及が少ない、あるときは『形式』だけ言及し『内容』に及ばなかったため、『形式』を重んじ『内容』を軽んじている印象を与えてしまった」のである<sup>(22)</sup>。このように「形式」への言及が多かったのは、充実した「内容」をもつ新文学とするためには「形式」の解放から着手すべきとした胡適の方法論的特質に起因するものでもあった。1920年代後半からは「内容」に対する具体的な論及の欠如を補うため、マルクス主義文芸理論の受容を背景に、「階級性」

を組み込みながら新文学を構築していこうとする動きが瞿秋白による文芸大衆化論争などにみられた。こうした動きによって、「五四」解釈はマルクス主義文芸理論の受容を背景に「左傾化の色彩」を帯び<sup>(23)</sup>、胡適思想もそうした思想史的系譜のなかで論じられるようになったのである。

第二に、1950年代の胡適批判が中国共産党による「思想改造」および「階級闘争」の一環として展開され、そうしたなかで「形式」だけが胡適の主張から取り出された点があげられる。中国共産党内で指導的立場を確立させた毛沢東は1940年に「新民主主義論」、1943年に「在延安文芸座談会上的讲话」を発表している。ここで示された「毛沢東の革命路線」は「五・四運動における知識人のあり方をさらに克服せんとする実践思想」として、人民共和国成立後の文芸政策を規定していくことになり、さらにこれら40年代初頭の毛沢東による論説が「自己批判」や「思想改造」といった人民共和国成立後の「知識人受難の歴史」を予感させるものであったことに留意しなければならない<sup>(24)</sup>。すなわち、1950年代の胡適批判はこうした思想史的系譜において展開されたものなのである。1950年段階では中国思想界における胡適思想の影響の大きさを改めるため、知識人を対象に「思想改造」の一環として胡適が批判の対象となった。そして、1954年の俞平伯の紅樓夢研究に対する批判は知識人の受難をさらに深刻なものとしきつかけになった。毛沢東による一通の書信が発端となり、はじめは俞平伯の紅樓夢研究に対する「学術批判」であったのが、そこに「政治的批判」の要素が加わり、両者が混沌とする形で資産階級に対する徹底した政治運動へと化してしまったのである<sup>(25)</sup>。そうした系譜において、毛沢東に書信で直接名指しされ、俞平伯へ影響を与えているとされた胡適思想は激しい「階級闘争」の一環として批判の対象になったのである<sup>(26)</sup>。その厳しい批判運動のなかで、「形式」だけが取り出され、胡適に対する批判の論点に仕立て上げられることになる。具体的にいえば、胡適の文学論は「形式」を優先させたものであるとして、その形式主義的な文学論は唯物論の原理に反するものであり、資産階級による反動的な唯心論と結びついた文学論であると論難されるに至ったのである<sup>(27)</sup>。

## むすびにかえて

本小論では、「五四」の思想史的系譜をふまえながら、新文学の「形式」と「内容」に関する主張を事例として、胡適のいかなる点に批判を受ける余地があり、そうした批判がいかに形成されてきたのかについて考

察してきた。

胡適の「文学改良芻議」は文学革命の口火を切る存在となり、「五四」の思想的意義においても果たした役割の重大性は大きい特筆すべきものである。胡適は従来の難解な文言文からの転換をはかるために、「内容」をとまなわなまま「形式」だけに縛られている旧文学の状態を問題視していた。そのうえで、豊かな「内容」をもった新文学を創り出すために、胡適は「形式」の解放から取り組むべきであると主張した。このように「形式」の解放から取り組むべきであるとした点は胡適の文学論に内在する方法論的特質であると同時に、この点がマルクス主義的な文芸思潮の強まりを背景として批判にさらされ、胡適批判の主たる論点に仕立て上げられることになる。1940年代初頭に党内で指導的立場を確立した毛沢東が示した論説は人民共和国成立後の文芸政策を規定していくことになった。そうしたなかで、1950年代に至ると、まず胡適思想の影響の大きさを改めるために「思想改造」の一環として批判の対象となり、1950年代半ばにはそれがアメリカ留学経験を有する胡適への激烈な「階級闘争」へと進展していったのである。胡適自身は豊かな「内容」をもった新文学を創り出すため、「形式」だけに縛られている旧文学の状態を問題視して、それを新文学建設に向けた議論の出発点としながら、「形式」と「内容」の双方が織りなす形で文学革命の方策を示していた。しかしながら、本稿でみてきたように、胡適へ批判が向けられた際には、胡適自身が当初に旧文学への議論の出発点として用いていた「形式」だけが前面に取り出され、胡適に対する批判の主たる論点として仕立て上げられる結果となったのである。

この1950年代の胡適批判は文学論に限ったものではなく、哲学、社会学、政治学、教育学、考証学など多岐にわたっていた<sup>(28)</sup>。中国共産党の文芸政策との関連において大きな力が注がれた1950年代の胡適批判について、自由主義の観点から同時期の香港、台湾ではいかにとらえられていたのだろうか。この課題については稿を改めて論じることにはしたい。

## 〔注〕

(1) 1950年代の胡適批判については、Jerome B. Grieder, *Hu Shih and the Chinese renaissance: liberalism in the Chinese revolution, 1917-1937* (Cambridge: Harvard University Press, 2013, Originally Published 1970)にある Appendix C: The Chinese Communist Attack on Hu Shihに詳しい。胡適再評価の口火を切ったものとして、

耿雲志による研究をあげることができる。耿雲志が自らの研究史を回顧したものとして、耿雲志「心長路遠、努力前行——回憶胡適研究的歷程」(耿雲志、宋広波主編『胡適研究論叢』黒竜江教育出版社、2015年、所収)。2000年代以降、伝記的研究でも胡適の文学論について論及がなされるようになった。例として、江勇振『舍我其誰：胡適【第1部】 璞玉成璧1891—1917』(聯經出版事業、2011年)、江勇振『舍我其誰：胡適【第2部】 日正當中1917—1927』(聯經出版事業、2013年)、羅志田『再造文明之夢 胡適伝(修訂本)』(社会科学出版社、2015年)。

- (2) 例として、黄克武主編『重估傳統 再造文明——知識分子與五四新文化運動』(秀威資訊、2019年)、王德威、宋明煒編『五四@100 文化・思想・歴史』(聯經出版事業、2019年)。
- (3) 欧陽哲生「被解的傳統——五四話語在現代中国」(『五四運動的歷史詮釋』北京大学出版社、2012年、所収)。
- (4) 工藤貴正「「文学革命」から「革命文学」の時代への転換(上)——馮乃超の日本における大正生命主義の受容一」(『愛知県立大学外国語学部紀要(言語・文学編)』第50号、2018年、所収)、同「「文学革命」から「革命文学」の時代への転換(下)——馮乃超の日本におけるマルクス主義文芸理論の受容一」(『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』第20号、2019年、所収)。
- (5) 大塚豊、小川佳万「中国——多様化の模索」(馬越徹、大塚豊編『アジアの中等教育改革 グローバル化への対応』東信堂、2013年、所収) 36頁。
- (6) 武小燕『改革開放後中国の愛国主義教育——社会の近代化と徳育の機能をめぐって』(大学教育出版、2013年) 143頁。
- (7) 課程教材研究所、歴史課程教材研究開発中心編著『義務教育課程標準実験教科書 中国歴史 八年級 上冊』(人民教育出版社、2006年、第2版)。
- (8) 石鷗主編『新中国中小學教科書圖文史 思想政治・歴史・地理』(広東教育出版社、2015年) 282頁。
- (9) 図1は前注(7)、42頁による。
- (10) 『嘗試集』の概要については、山口榮「胡適の『嘗試集』」(『跡見学園女子大学人文学フォーラム』第2号、2004年、所収)。
- (11) 黎錦熙(1934)は、胡適の「建設的文学革命論」によって「国語統一」と「文学革命」が「双潮合一」を呈すようになったとしている。黎錦熙『國

- 語運動史綱』（商務印書館，1934年）70頁。黎錦熙(1890-1978)，湖南省出身の言語学者であり，国語運動の当事者として錢玄同らと『国語周刊』を創刊した。主著『新著国語文法』は『馬氏文通』とともに中国近代文法学の創始とされるものである。道坂昭廣「黎錦熙」（『近代中国人名辞典（修訂版）』国書刊行会，2018年，所収）295-296頁。
- (12) 鈴木義昭「中国の文体改革 — 胡適 “八不主義” とその展開—」（『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』第10号，1998年，所収），山下大喜「胡適のアメリカ留学 — 文学観の形成過程に着目して—」（『グローバル教育』第20号，2018年，所収），同「胡適の文学史叙述 — 「清末」と「五四」の差異化を中心に—」（『歴史研究』第66号，2020年，所収）。
- (13) 表1は「与梅観庄論文学改良」（『胡適全集』第28巻，所収）317頁。
- (14) 表2は「吾国文学三大病」（『胡適全集』第28巻，所収）356頁。
- (15) 表3は「文学革命八条件」（『胡適全集』第28巻，所収）439頁，表4は「寄陳独秀」（『胡適全集』第1巻，所収）3頁，表5は「文学改良芻議」（『胡適全集』第1巻，所収）4-15頁，表6は「建設的文学革命論」（『胡適全集』第1巻，所収）52-68頁。
- (16) 『中国新文学大系・建設理論集』導言」（『胡適全集』第12巻，所収）280頁。
- (17) 「談新詩」（『胡適全集』第1巻，所収）159-160頁。
- (18) 沈国威「形式”与”精神”的拮抗 — 重読胡適《文学改良芻議》（一）」（『東アジア文化交渉研究』第6号，2013年，所収）。
- (19) 大島正二（1998）は，『馬氏文通』を「中国における文法学の成立を告げる」画期的著作であり，今日においても「中国文法学史における大きなメルクマール」とされるものと位置づけている。大島正二『中国言語学史 増訂版』（汲古書院，1998年）372頁。
- (20) 「六月十二日（星一）」（『胡適全集』第27巻，所収）148頁。
- (21) 「如何可使吾国文言易于教授」（『胡適全集』第28巻，所収）247頁。
- (22) 前掲書羅志田，135頁。
- (23) 前注（3），258頁
- (24) 丸川哲史『魯迅と毛沢東 中国革命とモダニティ』（以文社，2010年）32，154頁。
- (25) 丸山昇『文化大革命に到る道 思想政策と知識人群像』（岩波書店，2001年）75-84頁。兪平伯（1900-1990），祖父は考証学者の兪樾であり，北京大学在学時には新文化運動を通じて周作人の影響を受ける。紅樓夢研究は兪平伯が取り組んだ古典文学研究を代表するものである。奥山望「兪平伯」，前掲書『近代中国人名辞典（修訂版）』，771-772頁。
- (26) 大澤肇「現代中国における大学と政治権力 — 1949-1955—」（『史潮』80号，2016年，所収）。また，金達凱『中共批判胡適思想研究』（自由出版社，1956年）20-22頁。金達凱の『中共批判胡適思想研究』は胡適批判に対する同時代的な分析として，その内実を詳細に伝えてくれている。出版元の自由出版社はアメリカの資金援助を背景としつつ1950年代香港における自由主義思想の核となった政論誌『自由陣線』の編集を担っていた出版社である。1950年代香港における自由主義思想と『自由陣線』については，中村元哉『中国，香港，台湾におけるリベラリズムの系譜』（有志舎，2018年），陳正茂編著『五〇年代香港第三勢力運動史料蒐秘』（秀威資訊科技，2011年），區志堅「以香港為觀察的跨地域表述 1950年代『自由陣線』批評国共及欧美政策的言論」（陳明録等編『中国與世界之多元歴史探論』香港城市大學出版社，2018年，所収）。
- (27) 『胡適思想批判（論文彙編）』（生活・読書・新知三聯書店，全8輯，1955年，1956年）。「形式」を胡適批判の論点としているものとして，第2輯には林淡秋「胡適の文学観批判」，第5輯には王瑤「批判胡適的反動文学思想 — 形式主義與自然主義」，第6輯には褚斌傑「胡適文学史観批判 — 論胡適“白話文学史”」，何其芳「胡適文学史観点批判」。
- (28) 前掲書金達凱，2頁。

### 〔付記〕

本研究は科研費（特別研究員奨励費）の助成を受けたものである。





## Hu Shih's View on the Form and Substance of Chinese Literature

Daiki YAMASHITA\*

Hu Shih (1891-1962) is well-known as the key founder of literature reform (文學革命) in modern China. One of his papers “*Wenxue gailiang chuyi* (文學改良芻議)” played an important role at the onset of literature reform, in which he proposed the adoption of vernacular Chinese as the language of new literature. His view on the form and substance of literature was exposed to bitter criticism from the Chinese Marxists. Because of the class struggles in the mid of 1950s, his theory was overly regarded as an idealism approach in opposition to materialism.

This paper analyzes Hu Shih's statements concerning the form and substance of Chinese literature. The analysis of this paper reveals that Hu Shih fixed the order of priority for reforming Chinese literature from form to substance. He gave priority to the richer substance for new literature as he believed that the rich substance of new literature could only be expressed after the problems surrounding the rigid forms of Chinese literature were removed.

---

\* Graduate Student, Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University  
Research Fellow (DC2), Japan Society for the Promotion of Science

